

《ますらを》の内在化

——『萬葉集』の「ますらを」と戦争短歌におけるその受容（戦争と萬葉集）——

小松 靖彦

一 特別攻撃隊員の遺詠から

日中戦争・太平洋戦争下、『萬葉集』の歌と言葉は、「日本国民」に大きな影響を与えた。その中でも強い力を持ったものの一つが、「ますらを」である。「ますらを」は、『萬葉集』においては、¹⁾「武器を帯びた雄々しい武人」を意味した。日中戦争・太平洋戦争下では、²⁾（銃後）の多くの人々が、³⁾（戦地）の将兵を「ますらを」と称え、やがて⁴⁾（戦地）の将兵や、⁵⁾（銃後）の男性が自分自身を「ますらを」と意識するようになった。

特に太平洋戦争下においては、『萬葉集』の「ますらを」と現実の将兵の男性の無媒介な同一視が行われた。確かに両者は共通する面もあるが、その内容と規模には大きな違いがある。そこで、本稿では『萬葉集』などの上代文献については「ます

らを」戦争下を中心に十九世紀後半から敗戦までは《ますらを》と表記を区別して論述を進めたい。

太平洋戦争末期に至ると、航空機による体当たりやモーターボートによる艦船攻撃などの特別攻撃隊の将兵が、自分自身を《ますらを》⁶⁾と言い聞かせながら、生還を期さぬ自爆攻撃に向かうに至る（傍線は引用者。以下同）。

ますらをの首途送るか梅の花⁷⁾

（日記、一九四四年（昭和十九）三月十六日記事）

この俳句は、特別攻撃隊員に選ばれた陸軍少尉・穴澤利夫が三重県亀山の北伊勢飛行場での訓練を終え、いよいよ特別攻撃のために、九州の大分海軍飛行基地に前進する時の作である。穴澤は北伊勢飛行場から婚約者の伊達智恵子に送った書簡（三月二日付）⁸⁾の中で、床に活けてある梅について、「清浄そのもので、

人ならば聖人君子を想はせる梅は最近特に心をひきつける……」と記したが、その清浄な梅の花と呼応するような、潔い武人たる《ますらを》の覚悟を詠んでいる。

この句は、雄々しく、心の乱れは見えない。しかし、戦後に伊達が、「いよいよよ」とき、見送る人もおらず、利夫さんはひっそりと咲く梅に後引く思いをして行つたのでしようか」と読み取つたように、梅だけが咲き誇る人間の居ない情景と、疑問詞の「か」には、愛しい者を後に残してゆくことへの寂しさが揺曳している。

このように、特別攻撃隊員にとつて、自分自身を《ますらを》と表現することは、愛しい者との《別れ》の悲しみを断ち切り確実に訪れる《死》を受け容れることであり、また、それに収まり切れぬ《別れ》の悲しみを滲ませることもあった。

穴澤の句を始めとする遺詠によれば、特別攻撃隊員にとつて《ますらを》の意識は決して内発的な自然な感情に由来するものではなく、外部の観念を意識的に内在化させたものであったと考えられる。

そもそも、武器を帯びた雄々しい武人々という『萬葉集』の「ますらを」の観念自体が、特定の歴史的条件の下で人為的に創られたものであった。さらに、日中戦争・太平洋戦争下において、《銃後》の人々は、『萬葉集』の「ますらを」に、天皇と国のために生死を思わず勇猛果敢に戦う、深く頼もしく雄々しい武人々、天皇と国のために生死を超越して戦う、強靱

で《神》のような勇者たち、という新たな道徳的意味を付与しつつ、《戦地》の将兵を賛美した。特別攻撃隊員たちは、《銃後》の人々の眼差しの中の理想像としての《ますらを》を受け容れ、内在化したのである。特別攻撃隊員にとつて、《ますらを》の観念は、二重の意味で外部の観念であつたのである。

本稿では、『萬葉集』の「ますらを」の歴史的成り立ちと機制を問い、その上で、日中戦争・太平洋戦争下において、《ますらを》がその機制を大規模化しつつ、《別れ》と《死》を容するための装置となつていった過程を、《戦争短歌》を資料として明らかにするものである。

二 『萬葉集』の「ますらを」の成立

『萬葉集』の「ますらを」についての本格的研究は、敗戦後まもない時期に、日中戦争・太平洋戦争下の《ますらを》の称揚を批判し、『萬葉集』の「ますらを」を、歴史的に一回的なものとして捉えるところから始まつた。その研究と議論を通じて、『萬葉集』の「ますらを」が、『ますらを』のように幅広く「国民」が共有する道徳概念ではなく、七・八世紀の天皇に仕える貴族（上級・中級の官人）に限定されるものであることが明確になつた。

一方、初期の議論では、敬意をもつて釈迦を「ますらを」と呼んだ仏足石歌の例などの他の上代文献の用例と統一的に「ますらを」の原義を説明することが試みられた。確かに「ますら

を」という言葉は、本来、優れた男子^ヲを広く意味するものと考えられる。しかしその上で、一九七〇年代の研究において遠藤宏が主張したように、『萬葉集』の「ますらを」を、他の上代文献とは異なる独自のものと捉える視点が重要である。

但し、遠藤は、『萬葉集』の「ますらを」を、官僚貴族に限定された、感情に溺れぬ「大丈夫」という理想像と解釈し、その成立については「官僚貴族の成立と対応していると思われる」と述べるに止まった。そして、一九七〇年代以降の研究では、『萬葉集』特有の「ますらを」の成立の問題よりも、『萬葉集』内部における「ますらを」像の変化に関心が向けられた。

この研究史の進み方には、初期の研究において、『萬葉集』の「ますらを」を、英雄的・豪族的伝統を継承しつつ、律令制社会が成立する中で、「大夫」(『萬葉集』の「ますらを」)の多くの表記。本来官名を表す)にふさわしいものとして意識された人間像と捉えた西郷信綱の枠組みが強く働いている。この枠組みによれば、『萬葉集』の「ますらを」の成立の問題は、律令制社会の成立^レというところで止まり、また、律令制社会以前の性格がその成立後にどのように変化するかを説明することが焦点となるのである。

そこで、この枠組みに捉われずに、改めて『萬葉集』の「ますらを」の成立について検討したい。『萬葉集』の「ますらを」は、「ますらをのこ」「ますらたけを」を含め、63首65例を数えるが、それらに共通する最も基本的なイメージは、次の歌のよ

うな、剣・大刀・弓、矢、鞍、鞍などの武器を帯びた雄々しい
武人の姿である(なお、天皇に奉仕する^ヲという意味を常に
含むわけではない)。

舎人娘子が従駕して作る歌

ますらをのさつ矢手挟み立ち向かひ射るの形は見るにさや
けし
(巻一・六一)

そして、多くの場合、この歌のように武器を帯びた雄々しい武人像は、女性など他者(但し貴族)の「賛美と期待を込めた」(内藤明)眼差しによって捉えられたものである。

他者から賛美され期待される雄々しい武人としての「ますらを」はどのようにして生み出されたのか。その手懸りとなるのが、古代貴族の軍事的性格である。歴史学者・阿部猛によれば、壬申の乱までは軍団のような常備軍は存在せず、地方豪族の私兵的性格を持つ国造軍を公的組織が国司または国司の上に立つ総領を介して動員したが、天武・持統朝を通じて、中央貴族に軍事訓練を命じる一方、国造軍の軍備を郡家に集めるなど、全国的な軍事体制の整備が行われた。これによって、古代貴族は軍事貴族となったのである。

阿部が注目した中央官人に軍事訓練を命じた六八四年(天武天皇十三)閏四月五日の詔は以下である。

凡そ政要は軍事なり。是を以て、文武官の諸人も、
務めて兵を用ひ、馬に乗ることを習へ。則ち馬・兵、并て
當身の装束の物、務めて具に備へ足せ。其れ馬有らむ者を

ば騎士とせよ。馬無からむ者をば歩卒とせよ。並びに當に
試練へて、聚り会ふに障ること勿。若し詔の旨に忤ひて、
馬・兵に不便有り、亦装束闕ること有らば、親王
より以下、諸臣に逮るまでに、並に罰へしむ。大山
位より以下は、罰ふべきは罰へ、杖つべきは杖たむ。其れ
務め習ひて能く業を得む者をは、若し死罪と雖も、二等を
減らさむ。唯し己が才に恃りて、故に犯さむ者のみは、赦
す例に在らず。

政事の要を軍事と言明し、兵器と乗馬の習練に積極的に努め
ることを文武官に命じて、怠つた場合には親王以下全ての臣下
を罰するという厳格なものであつた。このような、天皇による
上からの強力な皇族・中央貴族の軍事貴族化によつて、武
具を帯びた雄々しい武人である「ますらを」が到達目標とし
て、また贊美の対象として生み出されたのである。『萬葉集』
において、「ますらを」の用例が初期万葉に見えず、壬申の乱
以後の第二期から見られることもそれを裏付けよう。

三 『萬葉集』の「ますらを」の機制

ところで、『萬葉集』では皇族・中央貴族が自分自身を「ま
すらを」と言う場合には、他者を贊美する時とは異なり、屈折
した表現をとる。

舍人皇子の御歌一首

ますらををや片恋せむと嘆けども醜のますらをなほ恋ひにけ

り

舍人娘子が和へ奉る歌一首

嘆きつつますらをのこの恋ふれこそ我が結ふ髪ひの漬ひちてぬ
れけれ
(卷二・二一八)

舍人皇子の歌のように、「ますらを」であるのに恋に苦しむ
自分を嫌悪・嘲笑する相聞歌が広く見出せる。このような歌い
方ができるのは、「ますらを」が皇族・貴族にとつて本有的な
ものというより、到達目標・理想像であつたからである。しか
し、道徳的に自らの至らなさを嘆いているのではない。

それを示しているのが、舍人皇子の返歌である。雄々しい「ま
すらを」であるからこそ嘆きが霧にまでなり、私の髪がひどく
濡れてほどけたのですね」と、迷惑な片恋であると切り返しつ
つ、舍人皇子が「ますらを」に他ならぬことを暗に贊美してい
る。この返し方から遡ると、舍人皇子の歌は、大袈裟に「ます
らを」たり得ぬことを嘆きながら、実は立派な「ますらを」
がこれほどまでに恋い慕うのだから私に靡きなさい」という
メッセージを伝えるものであつたと見られる。

「ますらを」の自負を持ちながら、敢えて「ますらを」たり
得ぬ恋の嘆きを言い、相手から「ますらを」への贊美を引き出
す、という働きを持った「相聞の言葉」が、「ますらを」であつ
た。恋の嘆きも、相手を通じて結局「ますらを」に回収される
のである。

相聞歌の「ますらを」がこのような機制であるとするならば、

旅先で、愛しい者への〈別れ〉の悲しみを歌う「ますらを」の歌も、その変化形と考えることができる。柿本人麻呂は、地方官であった〈われ〉（人麻呂本人ではなく、この歌のテーマを担う地方官一般）の、赴任先で娶った妻との別離を歌った「石見相聞歌」の第二長歌を次のように結んでいる。

「…」惜しけども 隠らひ来れば 天伝ふ 入日さしぬれ

ますらをを 思へる我も 敷妙の 衣の袖は 通りに濡れ

ぬ (巻二・二三五)

妻から遠くに隔たつてしまった悲しみを「ますらを」の嘆きとして歌っている。この「ますらを」は、天皇のために地方を治める雄々しい武人¹⁹を意味する。〈われ〉はその自負を持ちながら、それを保ち得ないほどに涙すると言うことで、その悲しみを受け容れている。そして、悲しみの激しさは、「ますらを」の属性として回収されるのである。

「石見相聞歌」は単なる私的相聞歌ではなく、持統天皇のもとで進められた中央集権的な地方統治制度の整備と深く関わる作品である。辺境の地・石見国（現在の島根県西部）まで中央貴族による統治が行われ、中央的な感情表現が及んでいたことを示すものである。それゆえ、〈われ〉は天皇に仕える武人たる「ますらを」でなくてはならず、また、その激しい〈別れ〉の悲しみは、石見国が天皇を中心とする世界の一部であることを証し立てるものとなる。

なお、皇族・中央貴族が自分自身を「ますらを」と言う時に、

以上のように屈折した表現をとることが一般的であった中、今井兼子も指摘しているように²⁰、例外的に大伴家持のみが直截に「ますらを」の自負を述べている。家持の「ますらを」の独自性（自分自身について言う場合に限らず）について、研究史は、一九七〇年代に、家持の「ますらを」の心を大伴の氏の子として天皇に奉仕する心であると指摘した小野寛の論を出発点として、家持がいつ、いかにして「ますらを」の心を獲得したかを問う方向で進んでいる。

しかし、改めて出発点に立ち戻るならば、小野が「ますらを」の心を問題にした点こそが重要である。家持は自分自身の「ますらをの心」を、a「安積皇子挽歌」の第二長歌と、b「陸奥国に金を出だす詔書を賀く歌」の第二反歌で歌っている。

a 「…」ますらをの 心振り起こし 剣大刀 腰に取り佩

き 梓弓 鞆取り負ひて 天地と いや遠長に 万代に

かくしものがもと 頼めりし「…」 (巻三・四七八)

b ますらをの心思ほゆ大君の御言の幸を聞けば貴み

(巻十八・四〇九五)

これらの「ますらをの心」は、家持以前の「ますらをの心」(巻十一・二三七六、人麻呂歌集)、「ますらをの心」(巻六・九三三五、笠金村)、「ますらをを心」(巻十一・二七五八、作者未詳)、「男心」(巻十二・二八七五、作者未詳)、「ますらをの聡き心」(巻十二・二九〇七、作者未詳)のような武人に本有的な雄々しさとは異なる。その意味するところは、武人として天皇に仕える覚悟²¹ (aの仕え

る対象・安積皇子は、家持の意識では正統な皇嗣)であり、しかも「振り起こす」・「思ほゆ」(「大夫たる者の振ひ立つ心になる」(澤瀉久孝「萬葉集注釈」)、「今こそ大夫たる者の奮い立つ心」というものと知った)(伊藤博「萬葉集注」)という言葉が示すように、意識的に呼び起こすものであった。

そして、神代から天皇に仕えてきた大伴氏の功業を自覚する「陸奥国に金を出す詔書を賀く歌」の長歌(巻十八・四〇九四)を承けるりによれば、「ますらをの心」は祖先以来、大伴氏に受け継がれてきたものである。

祖先から受け継がれ、重要な局面で呼び起こされる家持の「ますらをの心」は、「ますらを」の基本的意味である。武器を帯びた雄々しい武人から離れるものではないが、一回的個別的な現し身を超える強い独立性を持っている。家持はこのような精神性によって、「ますらを」を堅固に内在化した。しかしそれは、五世紀末から六世紀初に、宮廷を警護する靱負を統率して天皇に仕えることを職務としてきた名門氏族でありながら、家持の時代には、官僚制の整備による世襲職制の排除と、氏族軍や舍人・靱負の朝廷軍から軍団兵士による全国的規模の軍隊へとこの変化によって、大伴氏が実質的軍事力を失っていたことと裏腹の関係にある。

武器を帯びた雄々しい武人であることに止まらず、祖先のようであることを希求しながら、そのようにあり得ぬ家持にとって、祖先から受け継がれてきた、武人として天皇に仕

える覚悟である「ますらをの心」が誇りの源であり、生きる支えに外ならなかった。

なお、家持は次の歌のように、防人にも「ますらをの心」を認めた。

c 「……大君の命のまにまますらをの心を持ちて
あり巡り事し終はらば障まはず帰り来ませと斎瓮
を床辺に据ゑて白たへの袖折り返しぬばたまの
黒髪敷きて長き日を待ちかも恋ひむ愛しき妻らは

(巻二十・四三三二)

それは精神性を重視したからこそであろう。防人歌において防人自身やその家族が、防人を「ますらを」と言うことはない。しかし、家持は、東国出身の農民兵であっても「皇御軍」(天皇の軍隊)の兵士に外ならぬ防人が、舍人・靱負の朝廷軍の伝統を引き継ぐことを強く期待したのである。

四 《ますらを》としての幕末の志士

日中戦争・太平洋戦争下における《ますらを》像の出発点は、幕末の志士たちの和歌にある。それが、日清戦争・日露戦争後の、《ますらを》を称える楽曲「命をすて、」(作詞者不詳、滝廉太郎作曲、一八九七(明治三十)・一二)や「我神州」(砂沢丙喜治作詞、滝廉太郎作曲、一八九九、日中戦争勃発後、間もない時期に作られた「国民歌謡」の「征けよますらを」(土岐善麿作詞、堀内敏三作曲、一九三七(昭和十二)・二二)などによって普及し、さらに(戦

争短歌)によつて深く浸透し、大きな力を持つに至る。

本稿では、楽曲の《ますらを》の検討は今後の課題として、まず幕末の志士たちの《ますらを》の要点を、日中戦争下に出版された小泉芝三^{〔維新志士〕}『勤王詩歌評釈』(立命館出版、一九三八・五)に拠つて押さえた^{〔2〕}。

志士たちの和歌の《ますらを》は、精神性を重視する大伴家持の「ますらを」を受け継ぎつつ、その意味を、天皇と国のために身を捧げ、勲を立て後世に清い名を残す雄々しい武人に拡大している。そして、自分自身を《ますらを》と呼び、天皇と国を思う心を鼓舞したのである。その典型が次の歌である。君がため身を尽くしつ、益^{〔益雄〕}荒雄の名をあげとほす時をこそ待て

黒沢忠三郎(水戸藩士。桜田門外の変で死罪。七九頁)
志士たちが、実際に家持の歌をよく読んでいたことを示す歌もある。

別れに望^{〔望〕}みてよめる

母

かくぞとは思ひさだめしことながらさすがに憂きは別れな

りけり

返

草臣

別れうき習ひはあれど大丈夫のしのぶは国のみためなりけ

り

再び草臣に

母

剣大刀いよ、ときつ、大丈夫の清き勲を後に知られよ

「草臣」は下野宇都宮出身の児島強介の号である。児島は商家の出で、坂下門外の変への関与で幕府に捕えられ獄死した。右の三首目の母・益の歌は、明らかに次の家持の歌を踏まえている(訓読は寛永版本に拠る)。

剣^{〔剣〕}大刀いよ、研^{〔研〕}ぐべし古^{〔古〕}ゆさやけく負^{〔負〕}ひて来^{〔来〕}にしその名ぞ
(卷二十四六七)

しかし、祖先以来の輝かしい歴史を持ち、天皇に側近く仕えた中央貴族である家持とは異なり、幕末の志士たちの多くは、天皇への拝謁も叶わぬ、下級の武士や商人・農民であった。むしろ、そうであったからこそ、家持が防人にも認めた、武人として天皇に仕える覚悟、という部分をクローズアップしつつ、《ますらを》の語によつて、階級を一気に飛び越え、自分自身を天皇と精神的に直接結び付いた存在としようとしたのである。倒幕の挙兵に失敗し囚われの身となつても、

菰着てもむしろに寝ても大丈夫の大和魂なけがるべき

(平野国臣。筑前福岡藩士。一八九頁)

と歌うことができたのもそのためである。「^{〔維新志士〕}勤王詩歌評釈」に《ますらを》の歌と同内容の「ものふ」の歌も見えるが、それが《ますらを》に比べて少ないのは、「ものふ」が「武士」という階級性を想起させる言葉であったからであろう。

なお、児島とその母の贈答歌が、家族の(別れ)の辛さを、児島自身が《ますらを》たる覚悟を定め、母もそれを後押しす

ることで受け容れようとしていることにも注目したい。柿本人麻呂の「石見相聞歌」の「ますらを」と同様な機制が見られるのである。しかし、児島の「国のみためなり」という断言に表れているように、「ますらを」としての使命感がより強く前面に打ち出されている。

その一方で、志士たちの《ますらを》の歌には涙すること（別れ）に限らず、を肯定するものもしばしば見出せる。

わかれてはまたあふことのかたければ益良男の袖ぞ露けき（平山兵介。水戸藩士。坂下門外の変で討死。九三頁）

平山は家族（または友人）との〈別れ〉の悲しみに涙する。志士たちは、天皇と国のために身を捧げる強い使命感を持ちながらも、決して冷徹ではなく悲痛の涙を流す《ますらを》を理想としたのである。

五 〈別れ〉の悲しみの共有——日中戦争下の

《ますらを》

日清戦争・日露戦争を経て、近代の〈天皇の軍隊〉である「皇軍」の将兵が、《ますらを》と称えられるようになった。近代の〈天皇の軍隊〉は、「国民皆兵」主義をめざす一八八九年（明治二十二）の改正徴兵令に基づいて組織された、農村兵を母体とする大衆軍であった。農村兵中心の将兵を《ますらを》と称えることは、幕末の志士たちがクローズアップした「階級を飛び越えて天皇と精神的に直接結び付いた武人」という《ますら

を》の特性を受け継ぐものである。

但し、幕末の志士たちは外ならぬ自分自身を《ますらを》と称していた。大演徹也によれば、近代の「皇軍」においては、天皇に対して兵士が一方的な情緒の一体感を身に付けるために徹底した教育が行われていた。にもかかわらず、日中戦争・太平洋戦争下で編まれた〈戦争短歌〉の合同歌集を通覧すると、意外にも将兵が自分自身を《ますらを》と称する歌は少ないのである。

〈戦争短歌〉の合同歌集によれば、日中戦争下では、天皇と国のために戦う深く雄々しい武人（が《ますらを》の最も基本的な意味であった。「皇軍」の将兵が、自分自身をそのような《ますらを》としてストレートに鼓舞する歌は、管見には次の一首しか入らない（四角で囲んだ数字は「二覽」の戦争短歌合同歌集番号、漢数字は頁数。ルビは原文のまま。以下同）。

二重橋皇居遙拝

国の大帝（みかど）に心誓ひていでたたまますらをわれにのこすこと
なし

鈴木祐喜（①・二五二）

むしろ、将兵が自分自身を《ますらを》と言う歌では、家族への思いが強く表れている。

応召の日に

刀佩きしますらを姿吾子たちへかたみにせまうつしゑに
撮る

手紙

吉沢仁介（④・一一二）

朝霜ふみ神詣ですてふ吾子の文に涙あふれおつますらを我も
久我保義 (一・九三)

右の第一首の作者は〔4〕卷末の「作者略歴」によれば陸軍衛生大尉である。予備役から召集されたか。佩刀した将校として正装を《ますらを》の姿と意識しているが、それを形見にしたいと《死》を覚悟する言葉の裏に、子どもたちへの後ろ髪を引かれる思いが滲んでゐる。第二首の作者は、戦地に届いた我が子からの手紙に涙を流す。

このような歌い方は、『萬葉集』以来のものと云えるが、悲しみの激しさをもその属性の一部として回収する『萬葉集』の「ますらを」や、強い使命感と悲痛の感情が並存・拮抗する幕末の志士たちの《ますらを》に比べると、これらの《ますらを》は《別れ》の悲しみを抑えるもの（あるいは抑えきれぬもの）としての性格が強い。

その背景には、日中戦争に動員された兵士の多くが予備役・後備役の召集兵であったことがある。現役を終え市民生活を送っていた予備役・後備役の兵士たちには、志士のような使命感は希薄であつたらう。さらに、兵士たちが、天皇に対して強く慎み畏まる心情を懐いていたことも考えられる。それを示すのが、「東支那海」を渡る兵士たちを称えた、傷痍軍人・酒井徳太郎の歌である。歌人の松村英一による添削の結果、

天皇のみことのまにまますらをは大わだ越えて征きにける
かも

〔13〕三九

という勇壮な歌となつたが、酒井の原作は、
天皇の召のまにまに御楯らは大わだ越えて征きにけるかも
であった。「御楯」は、『萬葉集』の次の今奉部与曾布の防人
歌に由来する言葉である。

今日よりは顧みなくて大君の醜の御楯と出で立つ我は
(卷二十・四三七三)

酒井にとつては、大君のための「賤しい護りの御楯」(文部省編・久松潜一校訂解説『萬葉集』日本思想叢書、大日本教化図書、一九三三・一二)の意味である。「醜の御楯」の方が、《ますらを》よりも兵士としての自分自身の意識に近かつた。日中戦争下の将兵にとつては、家族との《別れ》の悲しみを強く意識する時に、それを抑え、引き取る一種の護符として呼び出される言葉が《ますらを》であつた。

ところで、松村は酒井の歌の添削について、「御楯」は元來防衛の意を含むが、「今度の場合にはもう少し積極的な意味を含んだ方がよいのではないかと思つて改めたのである」と述べている。この「積極的な意味」こそ、《銃後》の人々が《ますらを》としての将兵に期待したものであつた。日中戦争下、《銃後》の人々は《ますらを》を賛美する《戦争短歌》を数多く詠んだが、それらは「天皇と国のために戦う潔く雄々しい武人」という《ますらを》の基本的意味に、より「積極的な意味」を付け加えている(以下、出征、戦地、戦死の順で引用)。

いくさのかどで。

太刀はきていましいでたつますらをみればたのもし夫とおもふに
吉井玉枝 (10・二六五)

夫に召集令来る。

生き死にのさだめは知らねますらをが心の極み戦へわが夫

丸川貞子 (10・二一九)

春寒に花うるはしと戦地より言たのもしよ天のますらを

東京市 高鍋婦美代 (2・二四)

上海北四川路をゆきて

よこしまの棲める都をくだかむと矢玉となりて散りします

らを

松正カツエ (4・一五二)

右の第一首・第三首の〈頼もしさ〉、第二首・第四首の〈生死を思わぬ勇猛果敢さ〉はその代表的なものである。

しかし、〈銃後〉の人々は、天皇と国のために生死を思わず勇猛果敢に戦う、潔く頼もしく雄々しい武人として《ますらを》をひたすら賛美していただけではなかった。

田口正太郎妻急逝の日召集令状を受く。

ねむごろに妻のなきがらにこと言ひてたちゆかむとす益良
金子信三郎 (10・六六)

ますらをの母我けさは万歳をいはむと思ひき遂ひにいひえ

ず
高桑文子 (1・二六六)

塹壕のかけにおきふすますらをに思ひはいたし秋ふかみゆ

く
上井園子 (10・七四)

一塊の骨とぞなれるますらをのすがしさはつひにわがもの

ならぬ

翁たつ子 (10・二八四)

これらの歌では、兵士を《ますらを》と称えることが、妻の遺骸をそのまま置いて出征しなければならぬ友人への哀憐(第一首)、わが子を戦地に行かせる悲しみ(第二首)、戦場の夫を思い遣る心(第三首)、夫が遺骨となって手の届かない存在となつてしまった寂寥(第四首)を慰藉するものとなつていゝる。いづれも残された者が、親しい人を《ますらを》と美化すること、その深い嘆きを昇華しようとしている。先に引いた《ますらを》をひたすらに賛美する勇壮な四首の背後にも、実は残された者の悲嘆があつたと思われる。また、以上の八首の〈銃後〉の歌を通読すると、《ますらを》と美化することで、〈銃後〉の人々が同じ悲しみを共有するコミュニティを作つていゝるよう見える。

日中戦争下の〈戦争短歌〉は、〈戦地〉・〈銃後〉を問わず、親しい人との〈別れ〉(生別・死別)に關わつて、《ますらを》を詠むことが多い。それだけに、《ますらを》を詠む歌の作者は、母・妻・姉・妹・おばなど〈銃後〉の女性が目立つ。その女性たちの〈私的〉な〈別れ〉の悲しみを、〈公的〉なものに引き取り昇華させるとともに、女性たちの間で共有させるのが、日中戦争下の《ますらを》の機制であつた。そして、

ますらをの出征つ見れば吾が思ふくさぐさのことは小さか
るらし
大橋まさ子 (10・五三三)

という歌のように、この機制を通じて女性たちは自分たちを、

《ますらを》に対する《銃後》を守る存在であると意識し、戦争に組み込まれていったのである。

六 〈神〉の如き存在の賛美——太平洋戦争下の

《ますらを》

一九四二年（昭和十六）十二月八日の太平洋戦争開戦以後の《戦争短歌》では、《ますらを》の詠み方は大きく変化する。《ますらを》のベースとなる意味自体は、日中戦争下同様、天皇と国のために戦う潔く雄々しい武人であつたが、天皇のために命を捧げることが極端に強調されるようになる。

さらに、日中戦争下では、《ますらを》は《戦地》に赴く個人や、《銃後》の人々にとつて個人的に親しい人々について言われたのに対して、太平洋戦争下では、天皇と国のための戦い、《銃後》の人々と強い一体感で結ばれた兵士集団について言われるように変化する。太平洋戦争下の《ますらを》の基本的意味は、天皇と国のために命を捧げて征く勇者たちとまとめることができるといふ。

太平洋戦争下でも、「皇軍」の将兵が自分自身のことを《ますらを》と称する歌は少ない。しかし、日中戦争下とは異なり、その大多数は自分自身を《ますらを》としてストレートに鼓舞する歌である。

国を挙げて戦ふ今しますらををと召し出されしが嬉しくてなら
らず
新開敦「自覚」(14・四五)

大君の勅のまにま山河を越えて進まむ我等益良夫

平山鉄太 (28・三二一)

益良夫のたぎる血潮はみんなみの海をひた押しにおし渡り
たり
広地幸男 (28・三一四)

右の第一首の作者は、「比島派遣軍」（第十四方面軍）の陸軍少尉である。召集されたことを「嬉しい」という形容詞によつて直截に表現する。この感情表現を支えているのは、「国を挙げて戦ふ」という言葉に端的に現れている、「国民」との一体感に基づく強い使命感であろう。第二首・第三首は戦場で戦う《ますらを》としての決意を詠む。第二首の「我等」という人称、第三首の「ひた押しにおし渡りたり」という情景描写には、作者の勇猛な《ますらを》集団の一人としての誇りが窺える。もちろん、日中戦争下同様に、自分自身を《ますらを》と鼓舞する歌の背後には《別れ》の悲しみがある。第二首の作者平山鉄太は次のような歌も詠んでいる。

海山を隔てをりとも幼子のわが子の泣声聞ゆる如し

(28・三二二)

また、《ますらを》であるのに……という屈折した表現をとももの次の歌がある。

益良夫と思へるものを口惜しもよ夜毎やからの夢に立ちく
る
大屋重栄 (21・六〇)

しかし、このタイプの歌は極少数である。裏を返せば、将兵が自分自身を《ますらを》としてストレートに鼓舞しなければな

らない状況が、太平洋戦争下では、日中戦争下よりもはるかに深刻なものとなつていふと言へる。

ところで、平山鉄太・広地幸男の《ますらを》の歌は映像的である。《ますらを》集団の一員でありつつ、それを少し引いた地点から描写している。また、これら二首は抽象的である。確かに、第二首に「山河越えて進まむ」、第三首に「みんなみの海を」と空間を限定しているものの、前進する兵士集団像ほどの戦場にも当てはめることができる。

この映像性と抽象性がより増幅された形で表れるのが、太平洋戦争下の《銃後》の人々の《ますらを》を賛美する歌である。次の歌は《戦地》の《ますらを》の戦いぶりを映像的に表現する。ますらをの怒いかりひとときに裂さけて飛とぶ砲はうの轟とどろき火柱ひばしらの海

太田水穂 (12・四五)

水面に燃ゆる重油の炎くぐり我がますらをを遂に渡しし

臼井敦子「戦報」(27・一八二)

右の第二首は香港攻略戦(一九四一年十二月十八日)、第二首はシンガポール攻略作戦(一九四二年二月八日・十五日。特にイギリス軍が海に放出した重油に点火した「重油戦術」)を詠んだものであろう。二首の臨場感溢れる戦闘場面の描写は、ニュース映画や報道写真に基づくものに相違ない。

これらの歌の《ますらを》は兵士集団をさす。しかも、第一首は兵士集団である《ますらを》を降魔の神のごとき一個の意志ある存在として描き、第二首は「我が」と冠して、《ますらを》

集団との一体感を強調する。ニュース映画や報道写真によって、新たな《ますらを》像が生み出されたと言へる。

また、《銃後》の人々の歌には、《ますらを》集団を抽象的に賛美するものが多数見られる(以下、出征、戦地、戦死の順で引用)。

益良男の子

日のもと益良男の子はたたかひに赴くときしすでに神なり

太田水穂「日本頌詠」(17・二四)

強きかな天を恐れず地に恥ぢぬ戦をするなるますらをだけを

与謝野晶子 (12・四四)

ますらををはかく盛んなる死を遂げて軍神とならず流石に強し

山原久美子 (32・二〇五)

これらの歌の《ますらを》も、作者にとつて親しい個人ではなく、兵士集団あるいはあるべき兵士像を指している。なお、第三首の《ますらを》は、山原久美子の前後の歌によれば、真珠湾攻撃で戦死した特殊潜航艇の乗組員「九軍神」である。いずれの歌も《ますらを》を《神》の如き強さを具えた存在として称えている。

さらに、太平洋戦争下の《銃後》の人々の歌には、出征時の賛美の歌とも、戦地の兵士集団への賛嘆の歌とも、戦死者を追悼する歌とも解せる、《ますらを》なるものを称揚・激励する、次のような歌も多数見られる。

起たち上あるますらをのころ火と燃えて灼やき尽すべしいとみくるもの

鈴木杏村「青き国土」(17・一九六)

花の如かれ

ますらをは花と散るべしをとめ子は咲きこそ匂へ国きほふ
とき 大賀知周「花の如かれ」(33・二五)

これらの歌は、戦いを仕掛けた者への燃えたつ敢闘精神や、花が散るように死ぬ潔さを《ますらを》の本性として期待し賛美している。

このような抽象的な《ますらを》の本性を凝縮した表現が《ますらをの道》であろう。

細^{こほし}戈千足^{ごせんじやく}の国のますらがいくく道には生きも死にもなし 大井広「かちどき」(『短歌研究』昭和十八年一月号、四頁)

武夫のゆくてふ道をゆききはめ四柱の神遂に還らず

いにしへよりますらをのみちさやけかり若き九人もふみゆきける 宮入盛男(右同、一五三頁) 松井如流(36・五二)

これらの歌によれば、《ますらをの道》は、天皇と国のために生死を顧みずに戦うという行動規範と内面的原理を意味する。そして、戦死することはその真髄を極めることである。《ますらを》は生死を超越する求道者とされたのである。³⁶

さらに、太平洋戦争下では、(銃後)の男性が、自分自身を《ますらを》と鼓舞する歌が詠まれるようになる。その殆どは影山正治の主宰する民族主義団体・大東塾刊行の歌集の歌である。大東塾の「勤皇」の理念が、(銃後)にあっても自分自身を《ますらを》と強く意識させたという特殊事情もあるが、次のよう

な歌によれば、《ますらをの道》という抽象的な行動規範と内面原理の確立が大きな影響を与えていると見られる。

工場にて朝夕皇居を遙拝しつ

君が為め雄々しく征きし大丈夫のその道我等つぎてぞゆかむ 浅井清(34・六三)

大東塾関係以外の歌では、次の歌がある。

戦をもちて歌に真向すすでにまなじりを決すますらををわれは 内藤振策(28・三二九)

作者は28『大東亜戦争第一歌集』の編者で、刊行時(二九四三・四)、五五歳。既に兵役の年齢を超えている。《ますらをの道》とは言っていないが、歌をもつて戦いに臨むと決意する時の《ますらを》は、抽象的な行動規範や内面原理を指している。

以上によれば、(銃後)の人々にとつての《ますらを》とは、天皇と国のために生死を超越して戦う、強靱で(神)のような勇者たちであった。日中戦争下の(銃後)の人々の歌においては、《ますらを》の賛美の背後には、親しい人との(別れ)の悲しみがあつた。しかし、兵士集団としての《ますらを》や、《ますらを》の抽象的な行動規範や内面的原理を賛美する太平洋戦争下では、それらと表裏一体の関係にあつたはずの私的感情を表現する歌は見出せない。

とはいえ、太平洋戦争下の(銃後)の人々も単純に《ますらを》を賛美していたとは思えない。その過剰なまでの賛美の背後にはむしろ、アメリカ・イギリスと戦うことに対する「国民」

の共有する巨大な不安と、それゆえに兵士たちに〈神〉のようであつて欲しいという強い願望があつたのであろう。

七 《ますらを》の内在化

第五、第六節で見たように日中戦争・太平洋戦争下の〈戦争短歌〉では、「皇軍」の将兵が自分自身を《ますらを》と称する歌は少ない。しかし、例外がある。太平洋戦争末期の特別攻撃隊員たちの遺詠である。

その《ますらを》は、太平洋戦争下の通常の戦闘に参加した将兵の場合と同じく、基本的には天皇と国のために命を捧げて征く勇者たちを意味する。また、勇猛な《ますらを》集団としての意識も強い。但し、特別攻撃隊員たちの遺詠では、次のような、先に戦死した戦友を《ますらを》と称え、後に続くことを誓う歌が中心となる。

行き行きし益良雄のあと吾つがむ大いなるわざ今日ぞいで
きて

林玄郎（陸軍少尉。一九四五年四月六日、沖縄作戦で没）
次々と出撃する《ますらを》たちとの繋がりの中に自分自身を位置付けることが、出撃即ち〈死〉を意味する特別攻撃を受け容れる方途であつたのであろう。

同時に、この《ますらを》の歌い方が、第六節末尾で引いた〈銃後〉の浅井清の歌（34・六三）と似ることが注目される。実は、特別攻撃隊員たちの《ますらを》の歌は、〈銃後〉の人々

の歌と重なるところが多々ある。

特別攻撃隊員たちの大きな戦果を期待する歌は、〈戦地〉の《ますらを》の戦いぶりを賛美する〈銃後〉の人々の歌と類似する。

益良夫の怒りひとときに裂けてとぶ特攻の轟火柱の海

宮崎勝（海軍一飛曹。一九四五年五月四日、
沖縄作戦で没、享年二〇）

この歌は、第六節に引いた太田水穂の歌（12・四五）を直ちに想起させよう。

さらに、特別攻撃隊員たちが好んで歌に詠んだのは《ますらをの道》であつた。

天かくる益良武夫のゆく道は醜の御楯となりて散るのみ

細田吉夫（陸軍中尉。一九四五年一月五日、
比島作戦で没、享年二四）

大丈夫のみに迷はなかりけり死して生ある命なりせば

原田愛文（海軍少尉。明治大学出身予備学生、
同年四月十二日、沖縄作戦で没、享年二六）

世の中に生きるも死ぬも一つなりかたきにつかんですらを
のみち

伊藤正一（海軍中尉、同年六月二十二日、沖縄作戦で没、享年二〇）
これらの歌の《ますらをの道》は、〈銃後〉の人々の歌と同様に、天皇と国のために生死を顧みずに戦うという行動規範と内面的原理を意味している。但し、第一首の「散るのみ」という言い切り、第二首の「迷はなかりけり」という言明、第三首の「か

た(難)きにつかん」と敢えて自分を困難な道に追い込もうとする姿勢は、却って迷いの深さを窺わせる。特別攻撃隊員たちは、《ますらをの道》を極める——生死を超越した求道者であることによって、迷いを抑え込もうとしたのである。

《銃後》の人々の歌と重なる《ますらを》の歌は、特別攻撃隊員たちが《銃後》の人々の眼差しの中の理想像としての《ますらを》を内在化していたことを窺わせる。それは、「最も直接に国家の為に働きたい」(穴澤利夫^②)という若者の切迫した使命感と、「還らざる任務」(同、ゆえの《死》の絶対的圧力に対する言い知れぬ不安によるものであつたらう。自らを《ますらを》と意識することで、《死》を個人的な事柄から観念的集団的なものに転化しようとしたと言える。

さらに言えば、生還を期さない特別攻撃の場合、隊員たちにとって「戦場」は想像上のものではない。そのため、既に《戦地》であるはずの出撃基地が、構造的に《銃後》に近いものとなっていたと思われる。隊員たちは、《銃後》の人々の《ますらを》像に親和する心理的状况に置かれていたのであろう。

《銃後》の人々は呼応するように、特別攻撃隊員を《ますらを》として賛美・追悼する次のような歌を詠んだ。

花よりもかくはしきものますらをのみ空に若きいのち散りぬる^①

中河幹子『短歌研究』昭和十九年十二月号、三二頁
飛びたてば既に神なる益良夫や雄心といふに泣きやまぬな

り

北見志保子「神風隊」(『短歌研究』昭和二十年三月号、二七頁)

特別攻撃隊の録音を聞きて

大君の御楯と死なむますらをのすみはてたまふいくたりの声
鹿兒島寿藏(同、三二頁)

第一首は「花よりもかくはしきもの」と若き命を惜しむ心を歌い、第二首は「泣きやまぬなり」と悲しみを直截に流露する。また、第三首の「すみはてたまふ」からは、《死》を前に平静を保つ特別攻撃隊員の声を耳にしての肅然とした心が伝わってくる。しかし、それらの感情は、《ますらを》として《死》を受け容れた特別攻撃隊員の賛美へと回収され、「自らの命を他人に命じられて失」わなければならぬ特攻作戦の「残酷」^③を見つめることには繋がらなかった。
太平洋戦争末期に、《ますらを》は特別攻撃隊員たちと《銃後》の人々を通じて、理不尽な《死》を感情的に受け容れるための原理として、強力な力を発揮したのであった。

注

(1) 前線と内地が海によって隔てられた日本の近代戦争が、「前線(戦線・戦地・戦場)と銃後という二元的なパラダイム」を生み出したとする坪井秀人の見解(『戦争短歌における前線と銃後——支那事変歌集』その他)山口俊雄編『日本近代文学と戦争——十五年戦争』期の文学を通じて)三弥井書店、二〇一一)に従い、

本稿でも(戦地)と(銃後)の違いを重視する。

(2) 「敵艦を木葉と覆す益良夫の雄心は祖ゆ受け継げるもの」(佐佐木治綱「大光」、17・二八九)など。

(3) 斎藤茂吉は、日中戦争下の一九三九年二月刊行の『柿木人磨評釈篇卷之下』(岩波書店)の、「健男の現し心も吾は無し夜昼といはず恋ひしわたれば」(巻十一・三三七六)の評釈において、「マストラといふ語の語感も現在吾等の持つものよりも、もつと生々したものであつたらしく、其等をも念頭に置いて味ふ必要があるだらう」(五〇九頁。傍点引用者)と述べている。評釈としてのみならず、『萬葉集』の「ますらを」と戦争下の(ますらを)の違いを感じ取っていた貴重な証言として注目される。

(4) 穴澤の日記・書簡の本文は、知覧高女なでしこ会編『知覧特攻基地』(話力研究所、一九七九)に拠り、財団法人特攻隊戦没者慰霊平和祈念協会編『特攻隊遺詠集』(PHP研究所、一九九九)、水口文乃『知覧からの手紙』(新潮文庫、新潮社、二〇一〇)を参照した。()のルビは、『知覧特攻基地』になく、『特攻隊遺詠集』または『知覧からの手紙』で付されているものである。

(5) 知覧高女なでしこ会編注(4)書(三六〇三八頁)には日付を欠くが、水口注(4)書に拠る(一五九〇一六一頁)。

(6) 水口注(4)書、一八二〇一八三頁。

(7) 本稿では、(戦争短歌)の語を、愛国や至誠を表現した類型的な愛国短歌と、戦地での個別的体験を歌った戦場詠の総称とし

て用いる。小松(小川)靖彦「大伴氏の言立て『海行かば』の成立と戦争下における受容―その表現および戦争短歌を通じて『戦争と萬葉集』―」(『国語と国文学』第95巻第7号、二〇一八・七)参照。

(8) 西郷信綱「萬葉人の世界」『日本古代文学』中央公論社、一九四八、上田正昭「社会と環境―ますらを論を中心として―」『国文学解釈と鑑賞』第24巻第6号、一九五九・五。

(9) 三枝康高「ますらを」の意味―萬葉集の精神についての一考察―(『国語と国文学』第36巻第12号、一九五三・一二)など。

(10) 遠藤宏「万葉集作者未詳歌と『ますらを』意識」『論集上代文学』第一冊、笠間書院、一九七〇。後に「古代和歌の基層 万葉集作者未詳歌論序説」(一・二・作者未詳歌と『ますらを』意識、笠間書院、一九九一)。

(11) 西郷注(8)書、「萬葉人の世界」。なお、西郷および以後の研究が『萬葉集』の「ますらを」の考察に当たり「大夫」の表記を重要な手懸りとしたことについて、中国文献を精査するとともに、萬葉集古写本を再調査した村田隆太郎「萬葉集」の「ますらを」―語義と文字表記との関連についての一考察―(『学芸国語国文学』第48号、二〇一七・三)が根本的疑義を呈している。

(12) 内藤明「万葉集」の「ますらを」と「たわやめ」『早稲田大学人文自然科学研究』第50号、一九九六・一〇。

(13) 阿部猛「平安貴族の実像」二四〇―二四二頁、東京堂出版、一九九三。

(14) この詔の本文と訓読は岩波文庫本『日本書紀』に拠る。

(15) この詔をはじめ、中央貴族に軍事訓練を命じた天武朝の詔について、笹山晴生の「地方支配を強化していくにあたって、その背景となる中央の武力を強化し、また軍事的に緊張した状況を維持することによって、中央豪族の支配層としての團結をつよめることを意図したのであろう」という説明(『古代日本の軍隊』講談社学術文庫、第一章・「皇軍」のなりたち、八八―八九頁、講談社、二〇〇四)が参照される。

(16) 軍王の巻一・五、六番歌については、稲岡耕二「万葉集の作品と方法」(第二章・一・軍王作歌の論―「遠神」「大夫」の意識を中心に)、岩波書店、一九八五)に従い、舒明朝の歌ではなく、第二期以降の作と見る。私も題詞が巻一・巻二で統一された「幸子」でなく「幸」であることから巻一第一次増補より後の追補と推定した(小川靖彦「万葉集の文字と表記」『国文学』第48巻第14号、二〇〇三・一二)。

(17) 舍人娘子の歌が、嘆きが霧となる発想に依拠しているとする伊藤博「萬葉集積注」などの解釈に従う。

(18) 相聞歌における「ますらを」の屈折した表現を、萬葉人の精神の表れではなく、相聞のための言葉と捉えるべきとする視点を提示したのは、太田真理「『ますらを』を思へる我」と詠むことをめぐって」(『古代文学』第52号、二〇一三・三)である。しかし、この屈折した表現が、公の存在であった官人に恋の歌を詠むことを可能にさせたと、(公―私)二元論に立つ太田の解釈

とは、私は別の立場をとる。

また、相聞歌における「ますらを」の屈折した表現について、既に今井肇子「大伴家持の防人歌の悲別の情に対する理解―『ますらを』たらんとする防人―」(『国文目白』第37号、一九九八・二)が、「ますらを」の自負を持っていることを前提に、「自身の行為を『ますらを』にふさわしくないと否定することで、逆説的に自らの『ますらを』としての自負が表現されている」という見方を示しているが、根拠が明示されていない。

(19) 「石見相聞歌」の捉え方については、トークイル・ダシー「万葉集」における帝国的世界と「感動」(笠間書院、二〇一七)の質疑応答における私の発言(四二頁)と、講演録でのダシーの見解(三五頁。講演後加筆)参照。

(20) 今井注(18)論文。

(21) 小野寛「家持―みやびをとますらを」『国文学』第19巻第6号、一九七四・五。

(22) 夙に保田與重郎「萬葉集の精神」(筑摩書房、一九四二・六)が、「安積皇子挽歌」において、「大君にさ、げられた道」としての「ますらを」が家持によって成立したことを論じているが(「回想と自覚」三四五頁)、戦後の研究史では言及されない。

(23) 笹山注(15)書、第二章・私兵の系譜、一六一―一六三頁。

(24) 小泉琴三^{維新志士}「勤王詩歌評釈」は、明治維新以後最も入手しやすく、読みやすい活字本である。日中戦争勃発後の刊行のためバイアスがかかっていると思われるが、逆に戦争下の人々に

とつてあるべき志士像を知る資料となる。

- (25) 小泉注(24) 書によれば、『慷慨詩歌集』の「くろがねもとはらざらめやますらをが国のためとて思ひ切る太刀」(有村治左衛門)が、『志士正気集』では「岩金もくだけざらめやものふの国のためにと思ひ切る太刀」となっている。なお、「ものふ」の歌では、『ますらを』の歌には見えない「道」が詠まれる。

- (26) 大濱徹也『天皇の軍隊』講談社学術文庫、第一章・「国民皆兵」の虚実、講談社、二〇一五。

- (27) 大濱注(26) 書、概観、二二―二五頁、第四章・天皇と「股肱の臣」。

- (28) 藤井忠俊『国防婦人会』岩波新書、一四七―一四八頁、岩波書店、一九八五、加藤陽子『満州事変から日中戦争へ』岩波新書、二二―二二八頁、二〇〇七。

- (29) 日中戦争下で将兵が自分自身を「御楯」と歌った数少ない歌は、『ますらを』の歌とは異なり、日常の仕事や故郷の自然との別れなどを歌い、死地に赴く覚悟は希薄である(小川靖彦「日中戦争下における『醜の御楯』の意識―聖戦短歌を通じて(戦争と萬葉集)―」、『日本文学』第64巻第5号、二〇一五・五)参照。

- (30) 鈴木祐喜の歌が、自分自身を『ますらを』とストリートに鼓舞するのは、二重橋遙拝という特別な出来事によるのであろう。

- (31) 日中戦争下の『ますらを』が同じ悲しみを共有するコミュニケーションを作るという捉え方は、佐藤織衣氏の指摘に拠る。

- (32) 『萬葉集』の「ますらを」論で飯田勇「男女関係としての宮廷

の文学―『萬葉集』の「ますらを」「みやびを」を視座として―」『古代文学』第38号、一九九九・三、太田注(18) 論文が提示した(公―私)という視点は、むしろ日中戦争・太平洋戦争下の『ますらを』にこそ有効と思われる。

- (33) ①『大東亜戦争 愛国詩歌集』に収録された短歌は、「十二月二十四日に大政翼賛会で催された『日本文学者愛国大会』の席上朗読されたもの、ラジオで放送されたもの、新聞・雑誌等に眼に触れたものの中から、適宜選択した」(『跋』五三頁)とある。太田水穂の歌は、時期的に、「日本ニュース」第81号(一九四一年十二月二十日公開)の「香港大攻略戦」を見てのものかと思われる(映像は、NHKホームページ内の「戦争証言アーカイブズ」に拠る)。白井敦子の歌の典拠は今後さらに探索したい。

- (34) 実際に「『ニュース映画』」という詞書のある(銃後)の(戦争短歌)もある(津田百合子〔27〕・二四九)。なお、日中戦争下で、明らかに新聞報道を踏まえて、『ますらを』を詠んだ(銃後)の歌としては、自爆した海軍中尉・梅林孝次を悼んだ「燃ゆる機上にハンカチふりつつ勇士のいかに祖国を愛しみにけむ」(中河幹子、⑩・二六九)の一首がある。なお、(戦争短歌)とニュース映画などのメディアとの関係については山口注(2) 論文がある。

- (35) 『ますらをの道』という表現は、『萬葉集』の「ますらをの行くといふ道ぞおほらかに思ひて行くなますらをの伴」(聖武天皇、卷六・九七四)に由来するが、本来この歌の「道」は、人などが

通行する所という物理的意味しか持たない。抽象の意味での《ますらをの道》は、日中戦争下の《戦争短歌》に「弟出征す／此の道によりて畏き皇国のますらをの道は直に行くべし」（北条文雄、〔6〕・三一六）、「君のため国のためにと捧げつる命たふとしますらをの道」（近藤昌夫、〔13〕・五七七）の二首の先蹤を見る。しかし、天皇と国のために生死を顧みずに戦うという行動規範と内面的原理の意味で普及するのは太平洋戦争下である。

(36) 「大東塾塾書」（昭和十九年四月三日付）など（大東塾三十年史編纂委員会編『大東塾三十年史』大東塾出版部、一九七二）。

(37) もう一つの例外が、傷痍軍人の歌である。《ますらを》であることを強く意識することが再起への支えであり、また二度と戦場に戻れぬ自分を納得させる術であった。これらについては、別の機会に論じたい。

(38) 以下の特別攻撃隊員の遺詠の本文と作者情報は、財団法人特別攻撃戦没者慰霊平和祈念協会編注（4）書に拠る（ルビが現代仮名遣いのルビを本稿では歴史的仮名遣いに改めた）。

(39) 日記の一九四三年九月十七日付記事。水口注（4）書、六一頁。
 (40) 一九四四年十二月七日付、伊達千恵子宛書簡。知覧高女などしこ会編注（4）書、三三三頁、水口注（4）書、九八頁。

(41) 中河幹子の歌は詞書に特攻作戦の歌と記さないが、制作時期と内容から判断した。

(42) 特攻作戦を拒否した、海軍航空部隊「芙蓉部隊」の指揮官・美濃部正の言葉（保阪正康『昭和史 忘れ得ぬ証言者たち』講談

社文庫、五七頁、講談社、二〇〇四）。

〔一覽〕戦争短歌合同歌集番号

- ① 書物展望社編輯部編『聖戦短歌集』成史書院、一九三八・一〇・一一
- ② 読売新聞社編『支那事变歌集』三省堂、一九三八・一一・三
- ③ 大日本歌人協会編『支那事变歌集 戦地篇』改造社、一九三八・一一・一一
- ④ 佐佐木信綱・伊藤嘉夫編『傷痍軍人聖戦歌集 第一輯』人文書院、一九三九・一一・一
- ⑤ 胡桃社同人編『聖戦萬葉集』都祥閣、一九三九・四・二五
- ⑥ 読売新聞社編『聖戦歌集』岡倉書房、一九三九・一〇
- ⑦ 佐佐木信綱・伊藤嘉夫編『傷痍軍人聖戦歌集 第二輯』人文書院、一九三九・一一・二〇
- ⑧ 斎藤茂吉・土屋文明編『支那事变歌集』岩波書店、一九四〇・一〇・二〇
- ⑨ 木村捨録編『歌集 戦線の夫を想ふ歌』日本短歌新聞社出版部、一九四一・五・五
- ⑩ 大日本歌人協会編『支那事变歌集 統後篇』大日本歌人協会、一九四一・一〇・二〇
- ⑪ 読売新聞社編『第二聖戦歌集』岡倉書房、一九四一・一一・二五
- ⑫ 大政翼賛会文化部会編『大東亜戦争 愛国詩歌集』日黒書店、一九四二・三・一〇
- ⑬ 日本放送協会編『聖戦短歌選』ラジオ新書、日本放送出版協会

- 一九四二・九・一五
- 14 陣中新聞南十字星編輯部編『南十字星』比島派遣宣伝班、一九四二・六・一五
- 15 岡山巖編『聖戦短歌鑑賞』育英書院、一九四二・九・二〇
- 16 浅野保編『評釈前線秀歌』教学書房、一九四二・一〇・一五
- 17 佐佐木信綱編『歌集新日本頌』八雲書林、一九四二・一一・八
- 18 桜田志朗編『大東亜戦争 防人の賦』スメル書房、一九四二・一一・八
- 19 尾崎孝子編『現代 女流銃後歌集』歌壇新報社、一九四二・一二・三〇
- 20 大政翼賛会文化部編『軍神につげ』大政翼賛会宣伝部、一九四三・一一・一〇
- 21 柳田新太郎編『大東亜戦争歌集 将兵篇』天理時報社、一九四三・一一・一
- 22 柳田新太郎編『大東亜戦争歌集 愛国篇』天理時報社、一九四三・一一・一
- 23 佐佐木信綱・伊藤嘉夫編『大東亜戦争 傷痍軍人歌集 御楯』千歳書房、一九四三・一二・一五
- 24 佐佐木信綱編『盲人歌集』墨水書房、一九四三・四・五
- 25 内藤鑑策編『大東亜戦争第一歌集』地平社、一九四三・四・五
- 26 赤間武史編『昭和詩人選集 撃ちてし止まむ』北日本出版社、一九四三・四・三〇
- 27 今井邦子編『歌集 鏡光』明日香叢書第六篇、青梧堂、一九四三・七・五
- 28 日本文学報国会編『大東亜戦争歌集』協栄出版社、一九四三・九・二〇
- 29 塚本篤夫編『つはものの歌』新泉社、一九四三・九・二五
- 30 雑誌兵隊編輯室編『兵隊の祝祭 南支派遣軍詩歌集』南支派遣報道部、一九四三・一〇・一〇
- 31 中村巳寄編『産業戦士 撃たずんば』図書研究社、一九四三・一一・一五
- 32 松田常憲編『大東亜戦争篇 昭和十七年度水薙年刊歌集』水薙叢書第七十三篇、高田弘、一九四三・一二・八
- 33 影山正治編『ひむがし年刊歌集(第二輯)』大東塾出版部、一九四四・一二・二五
- 34 影山正治編『歌 おほみいくさ』地平社、一九四四・九・二〇
- 35 折口信夫編『鳥船新集第三』青磁社、一九四四・一二・一〇
- 36 村崎凡人編『軍神頌』青磁社、一九四四・一二・一四
- (未調査主要合同歌集) 宮崎燐子編『支那事变歌集 壱塚の砂文字』協和書院、一九三八・九、藤井春洋編『鳥船新集第二』青磁社、一九四三・七)
- (こまつ・やすひこ) 青山学院大学教授